



13
2870
1-6



卷之六

目錄

披卷度時一時生真婦
孝由忠亦明教多給
身勸德心可人
談笑就活切

文子法
關山
氏

石田夢華畫

繪本報仇安達原

全部
六冊



縛本報仇安達原總目錄

○冊之一

一編

清水の嫉妬忽ち鬼女と變ず
八雲が奸ち更なる野合と媒川

○冊之二

二編

子やせし小波死を均を
圖らずして傳藏生を異を

三編

小波の幽魂顯て情郎に告る
傳藏が落魄鬼屋に白友に逢ふ

○冊之三

四編

死に均は人違て又幸に受く
身を托し賊奴に更禍を見る

五編

兵庫旅に出る八雲が居る死に
八雲家にある熟鳥が禍に遭ふ

○冊之四

六編

忠六忠を招く松落に走る
小萩貞を正して路傍に死に

○冊之五

傳藏路を失ふ八雲に逢ふ

昭和九年
七月九日
購求

七編

八雲序と同ふて傳蔵又話る

八編

忠六術と觀とて報仇と葛む

○冊之六

咎太時河窺ふと骸骨と乞ふ

九編

忠六金と士氣と賊の手にと死す

十編

咎太疾河發と村の首と養る

編列十條

全部六冊

真堵思と託と艱難と逸と

咎太仇河報とて本領と飯る

安部惟之

媳清水



貞婦小萩

孝兒 早川宮太郎



山客 山川傳藏



凶女八雲



繪本報仇安達原冊之一

浪華

第一編

箕山 文亭主人著
門人 辭元齋叟校

清水が嫉と忽ち鬼女と愛
八雲が奸ち更み野合と媒

人皇七十一代後三條院の朝は仕へ奉り。北面の
は安部惟之と云く人妻初瀬と呼て夫婦墮
くありけり。父い安部負任と云くは縁ありし
す。惟之は家の絶たる悔て秘に性と復して大
内に住す。されど相嗣の子なりれば且々夫婦な

げきけり。惟之つゞく思けるは後なまはる大なる不
孝といへる聖の戒めもあれば外室側室にさへし
て最端近き下司までも添ぶくことなましくめられ
ども其変なく。吾初瀬も順なる産なれば露に
さへち。違ふ恨むるの早きあらなくありく
うども。惟之は胤なれば箴人の女は逢みるも。
れども子の有べきなくて初瀬もともは是変と思ひ
煩ひぬ。さうぞ日頃清水の観音と崇みしと思ひ
年のかぶくは附ても。すくろぼく子種と授け
たまはせよ。夫婦のよき且みくはかきひるるも。

一心稱名たゆみぬ。常念恭敬とこくなへ思はば
枯木も花さる茶靡も仁と結ぐ之神の験のよし
くも其年よりたぐなむ身。の結をかげく
歩くは程ぬく一個の處子が産く。これこそ餘
名とて。清水の与りなりと清水とこそいふ号なり。夫
婦のよき最いつくしと深く。艱苦生長するは
かひて智恵鮮かき。容色嬌艶。はるるや
十玉の春は近れど。粧びくは次女もぬく。衣服は
目だりしと省き。そのうちさく人馴る名をいふに
たはるるむかりの目もその塩皿をぬき。不審思ふ。



春の日の光景 一

何れの艶元あいらしく。うばくかりき娘なれば
意もぶるもの。若手ちきど。世とけづり身操は
いふまで。大い楊の雪のなびくふりよて。うけ
ながすのこ。然るも縁の縄手。此世なれぬが。結
びて。公卿の人。平の行成とて人。あつらひけ
させて。すいて。貰ふと。の縁なれども。惟之。後と
嗣。も。娘なれば。彼。是。おもひ。うら。ども。行成。公卿。乃
雲の上人なれば。固辞。うら。遂。は。結。縄。と。とり。うて
うら。な。を。中。と。い。な。れ。り。斯。一。年。あ。り。過。け。る
ふ。い。づ。く。も。女。の。寄。合。い。色。よ。き。殿。子。の。う。い。さ。す。る

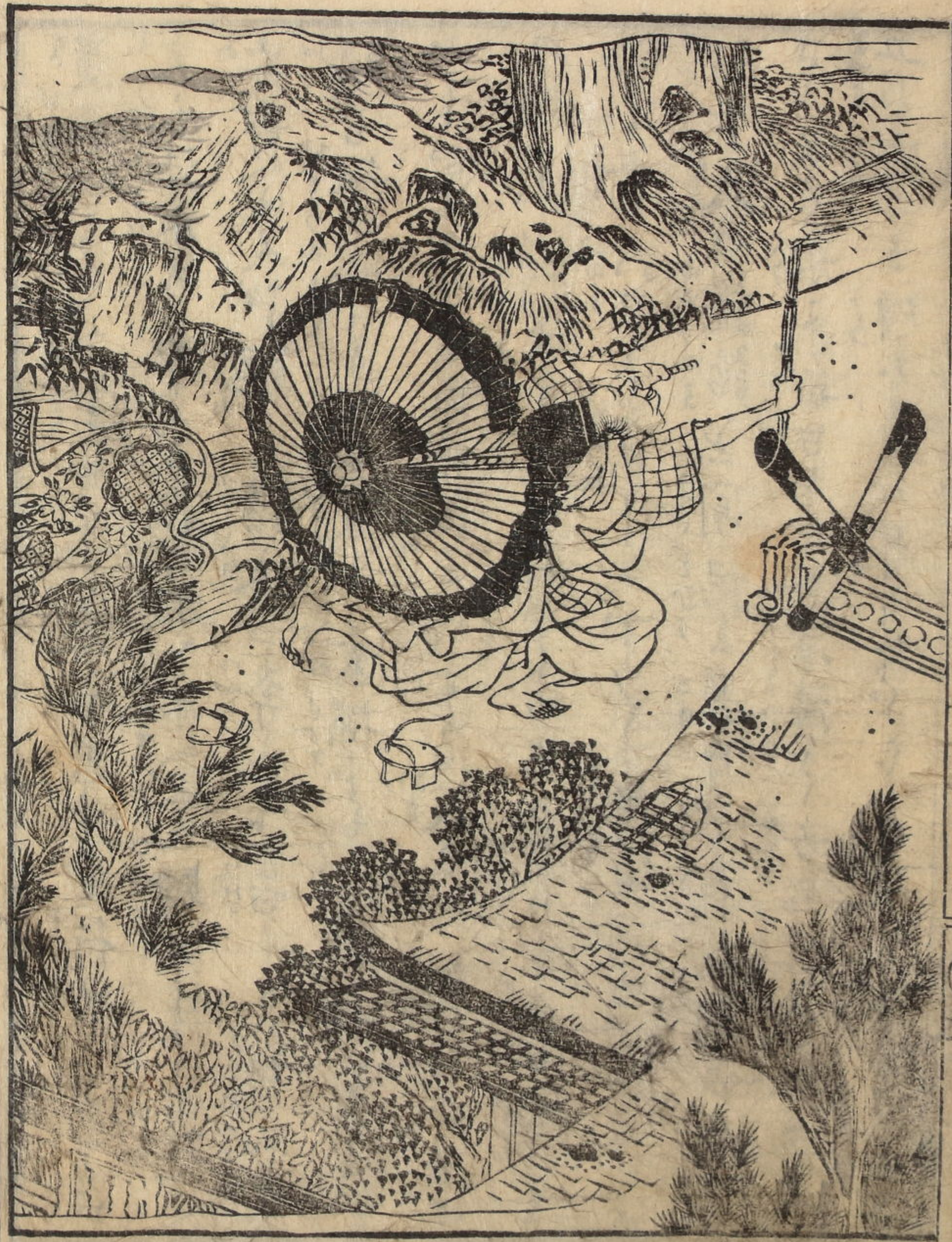
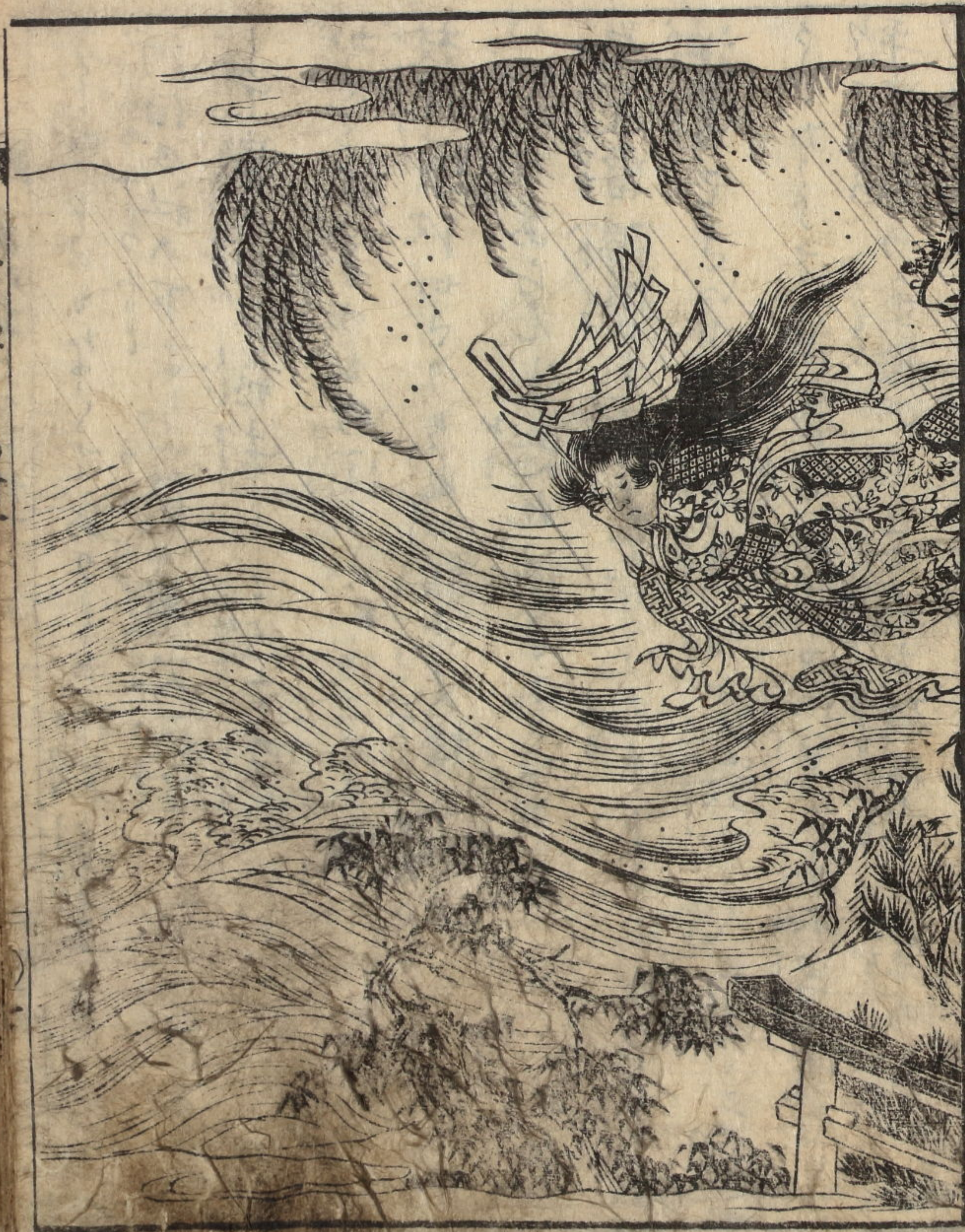
ならひ。北の公子の艶よくて。情。う。き。さ。は。形。莊。も。當。り
よ。て。肉。隆。よく。暗。づ。き。た。ま。い。て。最。あ。の。ぬ。き。し。め。ん。ど。婢
女。水。司。も。の。微。笑。う。説。話。す。る。平。家。殿。の。姫。君
生。づ。ろ。づ。き。さ。は。何。れ。の。公。子。は。只。い。ち。ど。懐。た。と
む。かり。の。一。言。い。入。づ。き。な。る。づ。ら。う。き。と。思。ふ
時。か。物。詣。め。か。つ。る。さ。け。なく。細。う。ち。に。彼。行
成。は。行。合。ぬ。婢。女。か。ね。て。の。略。ま。り。り。れ。ば。な。れ
が。と。私。語。は。行。成。の。か。も。後。の。隸。か。あ。れ。い。と。知
セ。ける。に。送。は。想。と。が。面。目。送。行。成。も。好。む。眼。用。の
あり。ぬ。れ。ば。暖。い。い。づ。か。れ。づ。ろ。は。見。差。次。る。更

は動かれぬ白きくも。近く袖すりて行過く。さあ
残るかなるね。別れこそいかり。にされぬ姫君
い急のあらは胸くらく逢たさ。看たさ。今
顧みられ。瘦身よりふの細布も。結々の胸はふさ
かり。且夕の食支もたへくなま。乳姫の女房
同おとく。はほどは意慕れん。い壁雲上のかけ
とくも思さう。あまふと墨より毫そめて
深思ぬきほど。さ川と知てた。く昔媒ら。ま
て。靦は口説みんと。葛れは。渡口は舟と。これ
て濃くすくも思ふ。想ふ。たけぬ。つど

くも通いせられ。本より行成も好く。得る帷の風
みささの靡を。かりの及支。夫より。宵おと。通れつ
結び。下緒とけす。思止気な。まおで。潤合て
往世も。又その先の世も。と欲ふ。さ。契は。見日と恨
あ。え。夜は。歎。さ。は。他。愛。い。な。かり。り。清水
是ほど音信た。一。岩橋の。夜の。り。りの。間。遠。く。て
睦言だ。も。あ。ふ。され。は。以。管。は。不。審。ぞ。り。り。あ。一。日。
つれ。く。は。清水。侍。女。み。に。げ。ね。り。ふ。は。日。頃。良。人。の。幸。を。
とく。お。い。する。が。外。は。不。審。こ。も。あ。ふ。ん。せ。も。と。い。は。を。
く。も。ち。り。ぬ。る。之。侍。女。の。偶。語。く。り。ふ。は。夫人。は。い。是。又

ありたまはず之主は南の姫君とふきなむ利唇
説落れれば清水いさくといふとく陶の中不の
たうく峯こゝて怨の谷のふきと思はれ色うとて。この
冷く見しが日ひふるも随う族石の之より内心夜双の
いゝ一夜家と潜いづたといふ遂は宇治川のほと
りも行ひ川瀬水巻は浸く三三夜があら。一
心丹誠いふより。是意破るゝおくべきとと彼橋魁は
祈誓となせしうば其怨執をいよりかくて之は
いう赤鬼となり黒髪ふり牛の角みくど
く。角だろろ一陳の風雲雨とよめて吹さくれば。

貴舟山より。飛去る。斯ともあらむ行成くといひ。
夫人清水のあらざれば。上と下へも驛どろり忙ざ
安部へも人び驅る清水の奔しと告ぐ。惟之丈
婦も驚馬慌る西よ東と索探ども。近きありよ
みおもうげもれ。山よ川よと人よ人蟻ほ草ホ
の梢より朽木は匿るためもあり。又水も濁る
之。五日六日と索し。ずく兔道河のほとり
行く人の説話を聞忍は是ほど。兔路河の川瀬
さうよく水は毎日ちも浸漬る女の容の看けるに
五月雨ふる頃なれば。足登もたぐいの冷く誰か近より



く着しものもなきてありし。昨夕、物更すぐさうろ
河伯の社の下より。一箇の團火、巨室に輝き、焰々然と
して、貴舟山より飛去し、人々の舌伝ふるひく。もの
がくるよ、拿のものの聞え、おどろき、馳けりて有
枝有葉、ひかりりれば、惟之夫婦、哭泣、行成父子
い、かくもあらんと恐れ怖さう、はりに其夜時を
名大雷、霹靂と鳴さやけり。雨さふみ、風たつより。
油雲、くさくさい。洛中、洛外、震動、人のあうろ。あ
う、なみず。漸、夜、白、風、雨、止けるよ。不思議、な
平家殿の金殿、いくところも、破、墜、土、屏のふん、残

らず、仆れ。中庭の樹木も、裂衣折れけるが。行成と深
勢、姫君い、い、こゝ之遙、かゝこの止、歳ふる案の木
の、其、指、み、あ、れ、くも、股、裂、木、う、かけたりける。着人、ま、く
人、懼、怖、の上、み、冷、かり。是より、行成も、疾、ふ、ふ、して
あり、が、驕、み、苗、泉、の、鬼、となすれり。其他、一、門、も、不、意
れ、大、殃、の、あり、り、れ、ば、神、は、佛、は、祈、修、養、は、よ、こ
鬼、符、お、と、な、い、けるに、巫、女、の、云、ふ、此、矢、こそ、清、く、が
怨恨の所、為、な、れ、ば、神、と、崇、ま、尊、敬、さ、る、よ、あ、つ
んと、い、い、い、か、く、なるべし、と、叱、ぎ、工、匠、は、命、じて、神、殿、に
誓、ひ、貴、舟、太、明、神、と、崇、ま、れ、ば、清、水、が、眼、散、り、て、ま、の

鬼責遂に失せ。あつれども其怨執嫉妬の餘どく。
一箇の塊石となりける。又神射となりしといひ。
暫休其頃、源家の武功盛んよして八幡太郎義
武威朝霞の拳ぐぐくやせきり。鎌倉に居城あ
りて、鋭氣に養われける。頃、承保三年二月仲のそら
都より、敕使光臨ありける。安部惟光も守護し奉
る。従ひ侍りける。されば八幡太郎義家、征夷大
將軍、後五位の下に昇進あり。帝より、武功を稱
めし。こゝより安部貞任と成りて、天下治國の祝
便なれば、鎌倉にも辱なくおぼしめされ。又万民も

君徳を唱へ、源氏の武威に感激して、国人上下より、
いの肩と開けり。あつるに安部惟光の敵父の仇報せ
し。おもひくも、素より父の反逆して、誅せし。又こと
み、叔父宗任も義家より属し、仁徳に服し、たれば、彼
と父の讐言とおもひ、及て天命を背き、人心を違はれ
は、是を憂ひ止む。あつるを、更にして、ふくむ。武道は
復したく思ひ。是より、鎌倉にきたりて、又こゝに
ひかりし。一日、叔父宗任より、へりて、孫故ものがたり
なす。けれ、宗任も、原香を聞て、あれば、是を憂ひ、あ
らば、將軍を告ぐ。いづんと許容すれば、惟光も大に



喜ぶ旅館みぞかりり一日宗任義家の殿上ま
かりあり一は惟之が託せし変じおもひ出く好時なりと
即ち進い告上ける小人が姪惟之ともふすとの家
兄貞任謀を伏せより以来大内より託しありに
おし救便光降に従ひたり。あつても真
公の徳恵を賜ふ奉りたれば再び武家は復た
旨み。まんべれい何ぞ貴冑のうちにても倍た人
とほ。願奉つるし告上りれば義家委曲まこし
くい。又其伎学を問たひし宗任謹く再び
言上及は素より東夷の産なればが幸より馬術

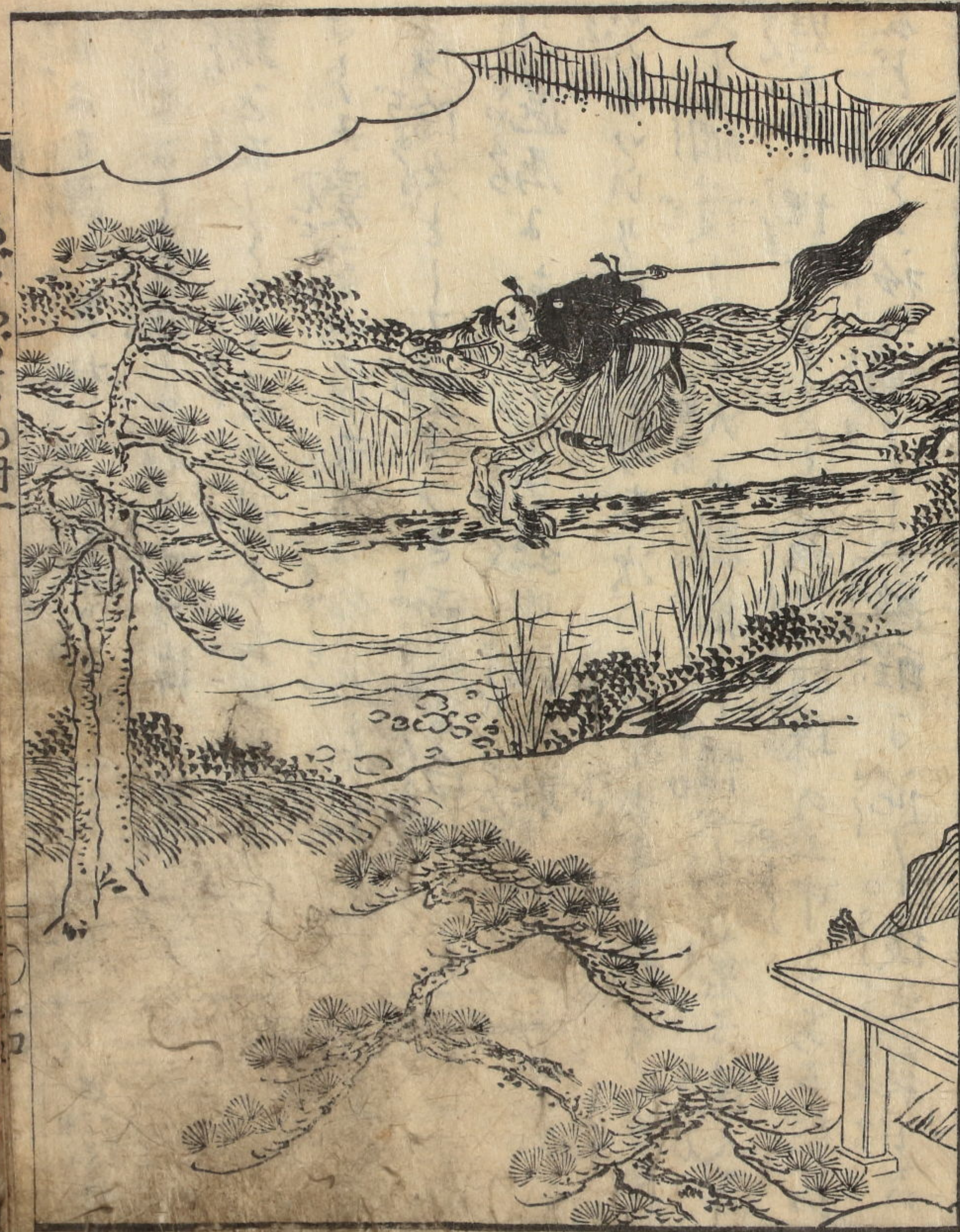
み身とら。大暑寒隆のいなく。子候といは義
家平時は馬場を招れて惟之が調護を上覧あるに平
生に塵一塵き人あき武士の中にもたれり日と同
まふなり。いれは義家も感稱す。い。遂に近
臣に倍侍せしむ。惟之はいくむ。喜び仁恵の己
すれがてて實に飯依し事まつり。茲に頼時が
餘黨のいもの山河兵部といふものあり。馬術に其
極を究る。巖石波濤を平陸を驅が。初め治馬
もあり。うども。慢心より。侮ふなれば。常々人を
のど。軽し。おのど。早め天下を告一人と思ふ。

頼時、頼義を誅せられ、今浪人の身となり。
もとより孫故親戚もあつたり。録倉の市甲の家
居と求め、つゝおいて山川傳藏と名を更め、天下先
双馬術指南所と牌とぶ。専教術。りある
りある。安部惟之が門人物部四郎江郎吉次と
公壯武遊行のかへる。酩酊は山川が門前と。より
に天下先双馬術指南所とい催真など大に冷
笑。過ける。内は傳藏とせとさく。忽ち平素
の強慢と發。忙が門は奇。聲。りて言
る。下なる。録倉の近。て。いす。ん。詞

馬は丹陳となせ。方と看とむれば。拙者
屋。て休息。され。馬伎の説話。及な
んと。顔目。發。嘲弄の光景。なれば。四郎
吉次も。より。憎。豎子。一言。夫執を
不望。彼奴が拙と笑。と。躍。及。四郎吉
次。醉後の渴。あれば。時。茶。を。門。
入。傳藏。さ。立。枕。音。台。の馬所。延。
四郎方隅。これ。馬。二。三。つ。中。に。も
逸。と。み。栗毛の猛馬。鞍。けて。お。あ。ま。
な。ざ。れ。り。題。山川傳藏。二個。と。吐。清。る

そ武藝馬字の支雄辨なううい説話りれ
四郎吉次も酔うて彼が言語はおくせーやさほど
調陳の支もやと。うう人相と観は頭上虎豹は
似う大漢根光人を射く色あろく。肉厚う
年記廿三四の壮武なり。四郎吉次も其容色を見
と俠氣を挫れさう億と之れは飲ぐぐ。あ
ひうらるるに足下調護の達陳とい存されども其
妙伎と看ぶんば稱譽あがた。葉い阿部惟之門
人なれば優さうろと見とめ。將軍へ聞い足下
の新は除補も頼んでんか。告う調護と望こ

ければ主系より知れんと思ふ山川傳藏完爾とて両
子の不望いるそがく侍れ一噴つるアさん只そ
べうい足下の口を掩う笑うふれどぞ。諸駁系お
さなる駿豆もおぼく栗毛の馬は騎してあづく
歩ませてる場はむふ四郎吉次は是方の様はあ
りて思はさうと稱をさうほどの。ともあるまじ
と偶語して看るたりに傳藏の馬は氣なう
彼方はあうるに向ふのちみ三丈四方ともあは
溜池あり其上は一隻の材木とらうあり前後
かみして中はど四間をう圓く看うが。傳藏の騎



馬もて既に其材木も蒐り。畜たふす。平陸を行か
し。みして卒む。むふの岸は清き。又馬の
頭を収。是方の浩みあやまて。已に訖り。顔色
さ。哀。四席吉次。仰然。開口。し。傳
藏除々として。堅。つ。兩人。白。言。る。い。さ。な。か
し。退屈。お。い。さん。未熟。の。調馬。耻。く。傳。と。す。
笑。つ。い。り。れ。い。四。郎。吉。次。い。告。い。出。ま。の。辞。を。教。馬
へ。調。護。う。な。と。大。い。感。極。惜。べ。蒐。る。連。人。と
賤。家。は。埋。お。く。と。夜。光。明。珠。の。土。中。は。あ。る。た。い。い
み。ど。を。初。め。嘲。王。い。酩。酊。は。訖。後。生。衆。と。い

豆下のごと。此なるべし。是と。憐。二。個。い。ま。お。く。と
か。り。る。此。す。い。傳。蔵。い。高。慢。の。舌。頭。を。と
な。れ。つ。ね。云。る。に。天。下。廣。く。武。術。馬。執。の。奥。と。
す。ぶ。る。と。こ。ろ。に。鎌。倉。は。あ。ら。う。だ。然。と。も。往。は。お。つ。て。い。昔
右。子。出。ち。の。れ。く。吟。乎。富。山。獄。と。我。と。み。し。始。く。天。下
の。ゆ。き。更。と。お。ほ。ふ。な。い。傳。は。人。な。さ。い。と。云。ふ。
り。れ。い。何。日。と。れ。鎌。倉。は。其。聞。へ。高。く。て。い。傳。り
一。い。答。言。も。あ。り。さ。り。上。智。は。あ。ら。う。だ。い。人。あ。く
い。後。易。く。近。臣。佐。從。の。中。も。彼。ら。れ。山。川。は。飯
依。く。擔。板。の。さ。ら。り。種。々。は。評。判。と。と。る。當

時馬道又寵を得たり。安部とて山川より及ぶ
お。時もある。將軍一聞達せんと已が伎の熟い
るより。師匠の拙伎も崇くおもふ。凡人のなかり一人
ても山川より人の多かりん。吏と願う。彼の用軍より
報とる。た。是る家にて舌を無弁して云らる。山川
が馬は騎に常人のふ。為にあらず。恐く。白樂星の
愛化なりん。當時調護の第一流といとれ。安部
惟之も山川が調馬とて。び着い。ふ。なび目と聞及
あ。と。次など。非。傍せる人もあ。う。り。さ。是。と。將軍
義家公。さ。こ。め。され。一日侍臣より余に。され。る。に。

山川傳藏といふ御者のものあり。やと。同。さ。せ。ける。み。
おり。や。山川が。門。第。の。もの。貴。前。に。あり。て。告。上。ら。る。に。
山川傳藏。吏。か。ね。て。う。け。わ。り。に。天下無双の。牌。と。出。
さ。る。陳。連。の。もの。み。て。常人の。及。ぶ。さ。あ。ず。な。
い。極。く。推。挙。な。せ。う。に。將軍。さ。こ。に。召。れ。自然。人。
口。は。違。さ。る。もの。も。あ。ん。と。忙。ぎ。め。う。よ。せ。て。試。べ。く。と。
即時。に。使。を。遣。う。山川。を。召。れ。られ。山川。大。喜。び。
天。の。吾。と。亡。さ。さ。る。よ。と。思。ひ。こ。進。ぐ。参。殿。の。う。け。
れ。は。拜。顔。免。許。な。る。の。上。將軍。曰。ら。る。は。汝。馬。術。の。吏。
聞。は。れ。は。今日。試。の。ため。召。よ。と。り。懸。く。彼。馬。と。

ん。さあ。佳穀とくもな。う。駿州の銘酒あり合
り。れ。進。さん。と。り。傳。蔵。好。く。た。ら。は。大。喜。り
ま。う。膳。と。盆。と。出。し。送。り。汲。り。け。る。は。茲。に。惟。之。に。經
の。小。波。と。り。る。び。古。自。ひ。く。あり。是。日。小。波。も。座。上。の。執。事
は。出。し。が。山。川。つ。く。小。波。の。艶。色。は。懷。遠。の。慕。の。こ。ろ
起。り。れ。は。色。情。の。方。せ。な。き。より。何。卒。吾。が。手。に。入。ん
し。の。お。と。や。い。滯。び。た。る。言。も。さ。う。つ。く。島。が。く。く。あ。れ
は。其。日。い。時。射。う。川。ま。う。黄。昏。も。は。は。め。る。ゆ。へ。惟。之。も。七
辭。く。別。か。た。る。是。より。山。川。傳。蔵。の。小。波。の。こ。ろ。際
おも。ひ。認。く。昼。夜。止。と。れ。く。せ。め。て。一。夜。の。添。卧。じ。も。海

欲。つ。よ。き。男。が。ち。れ。は。最。に。あ。り。る。に。茲。に。掃。井
よ。う。の。もの。園。ふ。女。は。八。雲。と。云。く。年。紀。四。十。む。かり。ま。な
り。一。軀。出。入。せ。し。は。是。の。安。部。方。へ。ま。い。る。す。一。旦。及
び。り。れ。は。是。婆。と。頼。み。く。我。お。も。ふ。胸。の。中。も。小。波。も。通。じ
る。れ。な。は。指。の。花。も。手。折。な。ん。と。或。夜。宿。は。彼。女。と。呼
く。私。語。話。し。る。に。我。ふ。く。小。波。も。心。を。結。の。日。も。久。し
り。れ。ど。已。寄。彈。で。の。孫。な。く。く。思。ひ。が。ふ。み。る。は。は
ま。い。安。部。へ。往。来。せ。し。よ。う。一。聞。か。れ。は。何。卒。吾。が。手。に
が。た。き。な。る。の。は。ど。連。く。口。説。わ。ん。と。頼。り。れ。は。軀。も
が。一。踏。跡。の。跡。ま。て。あ。り。く。山。川。う。ね。て。エ。ー。か。れ。は。金



子ナ西^{たの}む^{たの}り^{たの} 湯^{たの}の^{たの} ち^{たの}る^{たの}ー^{たの}と^{たの}与^{たの}れ^{たの}バ^{たの}素^{たの}より^{たの}欲^{たの}ふ^{たの}ま^{たの}
ぢ^{たの}かれ^{たの}バ^{たの}喜^{たの}け^{たの}ハ^{たの}笑^{たの}ハ^{たの}點^{たの}頭^{たの}ハ^{たの}す^{たの}ハ^{たの}最^{たの}安^{たの}き^{たの}事^{たの}ハ^{たの}存^{たの}
ぢ^{たの}れ^{たの}喜^{たの}ま^{たの}い^{たの}り^{たの}て^{たの}好^{たの}ハ^{たの}苦^{たの}ハ^{たの}れ^{たの}公^{たの}の^{たの}貴^{たの}慮^{たの}ハ^{たの}な^{たの}び^{たの}う^{たの}ー^{たの}
ア^{たの}さん^{たの}と^{たの}ー^{たの}立^{たの}飯^{たの}ん^{たの}と^{たの}さ^{たの}る^{たの}や^{たの}山^{たの}川^{たの}此^{たの}金^{たの}ハ^{たの}沙^{たの}ハ^{たの}つ^{たの}う^{たの}こ^{たの}
す^{たの}な^{たの}ー^{たの}と^{たの}ー^{たの}ハ^{たの}八^{たの}雲^{たの}ハ^{たの}是^{たの}ハ^{たの}い^{たの}及^{たの}む^{たの}と^{たの}ー^{たの}只^{たの}當^{たの}る^{たの}け^{たの}が^{たの}
山^{たの}川^{たの}是^{たの}非^{たの}ハ^{たの}と^{たの}ー^{たの}進^{たの}れ^{たの}バ^{たの}堀^{たの}ハ^{たの}固^{たの}辞^{たの}て^{たの}い^{たの}よ^{たの}て^{たの}さ^{たの}い^{たの}お^{たの}ほ^{たの}
し^{たの}め^{たの}さ^{たの}い^{たの}。あ^{たの}づ^{たの}ろ^{たの}り^{たの}ア^{たの}さん^{たの}と^{たの}て^{たの}あ^{たの}ろ^{たの}ハ^{たの}喜^{たの}で^{たの}斬^{たの}さ^{たの}飯^{たの}り^{たの}
り^{たの}。さ^{たの}れ^{たの}バ^{たの}議^{たの}ハ^{たの}も^{たの}陋^{たの}ハ^{たの}さ^{たの}老^{たの}女^{たの}と^{たの}近^{たの}づ^{たの}ー^{たの}べ^{たの}う^{たの}ハ^{たの}い^{たの}
宜^{たの}なる^{たの}う^{たの}な^{たの}ー^{たの}と^{たの}さ^{たの}ハ^{たの}八^{たの}雲^{たの}ハ^{たの}例^{たの}の^{たの}ど^{たの}ー^{たの}箇^{たの}の^{たの}ふ^{たの}も^{たの}の^{たの}
持^{たの}ハ^{たの}安^{たの}部^{たの}が^{たの}早^{たの}ハ^{たの}年^{たの}ハ^{たの}ろ^{たの}ろ^{たの}に^{たの}折^{たの}ハ^{たの}も^{たの}惟^{たの}之^{たの}丈^{たの}婦^{たの}ハ^{たの}

物^{たの}指^{たの}み^{たの}て^{たの}宿^{たの}ハ^{たの}あ^{たの}る^{たの}ハ^{たの}親^{たの}女^{たの}ハ^{たの}波^{たの}ハ^{たの}内^{たの}ハ^{たの}あ^{たの}り^{たの}如^{たの}ハ^{たの}八^{たの}雲^{たの}来^{たの}た^{たの}
り^{たの}と^{たの}婢^{たの}女^{たの}の^{たの}あ^{たの}ろ^{たの}ハ^{たの}ー^{たの}奥^{たの}ハ^{たの}通^{たの}ド^{たの}れ^{たの}ハ^{たの}聴^{たの}ハ^{たの}通^{たの}ハ^{たの}ー^{たの}
と^{たの}ハ^{たの}八^{たの}雲^{たの}ハ^{たの}深^{たの}居^{たの}行^{たの}ハ^{たの}ー^{たの}い^{たの}つ^{たの}も^{たの}の^{たの}ど^{たの}ー^{たの}和^{たの}唇^{たの}數^{たの}言^{たの}と^{たの}
巧^{たの}言^{たの}ハ^{たの}是^{たの}ハ^{たの}る^{たの}。彼^{たの}ハ^{たの}と^{たの}萬^{たの}ハ^{たの}少^{たの}弄^{たの}と^{たの}う^{たの}ハ^{たの}ど^{たの}ー^{たの}時^{たの}ハ^{たの}あ^{たの}る^{たの}
ハ^{たの}と^{たの}定^{たの}規^{たの}ハ^{たの}ハ^{たの}。あ^{たの}た^{たの}り^{たの}ハ^{たの}後^{たの}女^{たの}の^{たの}い^{たの}も^{たの}な^{たの}ハ^{たの}ハ^{たの}波^{たの}と^{たの}偶^{たの}坐^{たの}
ち^{たの}れ^{たの}ハ^{たの}時^{たの}ハ^{たの}ー^{たの}と^{たの}ー^{たの}ハ^{たの}八^{たの}雲^{たの}言^{たの}ハ^{たの}ハ^{たの}告^{たの}ル^{たの}ハ^{たの}ハ^{たの}傳^{たの}ハ^{たの}え^{たの}
れ^{たの}入^{たの}ハ^{たの}事^{たの}ハ^{たの}れ^{たの}ハ^{たの}も^{たの}告^{たの}ハ^{たの}さ^{たの}如^{たの}女^{たの}ハ^{たの}是^{たの}非^{たの}分^{たの}ハ^{たの}ハ^{たの}ハ^{たの}ハ^{たの}
山^{たの}川^{たの}家^{たの}ハ^{たの}行^{たの}ハ^{たの}ハ^{たの}家^{たの}ハ^{たの}ま^{たの}て^{たの}喜^{たの}ハ^{たの}私^{たの}語^{たの}た^{たの}の^{たの}ハ^{たの}ハ^{たの}ハ^{たの}
い^{たの}う^{たの}なる^{たの}孫^{たの}ハ^{たの}と^{たの}う^{たの}け^{たの}ハ^{たの}ー^{たの}に^{たの}外^{たの}ハ^{たの}ハ^{たの}如^{たの}君^{たの}の^{たの}孫^{たの}故^{たの}つ^{たの}て^{たの}
か^{たの}ろ^{たの}で^{たの}言^{たの}ハ^{たの}ハ^{たの}と^{たの}喜^{たの}ハ^{たの}ハ^{たの}ふ^{たの}ハ^{たの}ハ^{たの}許^{たの}託^{たの}ハ^{たの}あり^{たの}素^{たの}ハ^{たの}より^{たの}君^{たの}ハ^{たの}

操心正しき方かれは告止しと許容なりと種々
りなぐめ是心止れと進しうども急る心死とも悔な
しと拘せよと憑おひすや一賤きも固辞侍れ
媛の貴憤のいゝあふられど顧みず告上るなり
いゝ折ふさゝ合出も之ね小波は箱舟の否な
ふ顔むを八雲はあろおろつうで色よき反
変あそむと口説進つありるは惟之夫婦ハ物
指しし飯りれは家婢のあそでは教る小波も
端近く迎は出られ八雲は復こそ来かんし小弄物
そし一筐は收め其日ハ辞しそかりる欺る八雲

小波の首尾いゝあらんと口説しよ。あんむるなり
も解明を故なすべきの止動なれば定心たりし。あゝ
ふれし尚むいゝ思案をあるを癖の工更さふけ
る諸八雲心は思るよ若是更成熟ては若干の金
と得たりもあるな。獨言し喜るが其羽目いつ
もの小弄物に彼妾部家へ行とやし。小波は局は通
りれ小波ふれし待もよけたる更かれはいつは元
くありる。八雲あたり人なきと看し憐れりよせ
るるよ。そのふ賤きが尸で更にすれりふと。あ
小波は含笑しありぬ八雲はをくは偶指し。此せ一日

の夜情郎と潜むをヤベ。暖の中庭の月下は待りあ
ぐとついに小波の面ありめて蓋うく答もななく看れ
ば八重の更とさきより必遠へたなと早になぶめあり
けり去程は八重の解ありをりねば嬉しく思ふに信蔵
かへ行ちうくの活う。是れ一日の夜暖小波の中庭に
待べしとの更公必む。志のびくといふ。傳蔵の聞と
ふとく嬉しく今も逢見るに地がれれば小波のこと
思ひつけ指あり目とかがくく来る此一日の夜
と待たり

縛本報仇安達原冊之一畢



